

「万葉集を読む」 大伴旅人と山上憶良

群馬県立女子大学教授 北川和秀

大伴旅人・山上憶良年表

西暦	年号	天皇	執政	事項	旅人	憶良			
660	斉明6	斉明	中大兄皇子	山上憶良、生まれる		1			
661	7			(新羅に進発。斉明天皇没)		2			
662	天智元					3			
663	2			(白村江の戦い。百済滅亡)		4			
664	3					5			
665	4			大伴旅人、生まれる		1	6		
~~~~~									
690	持統4	持統	高市皇子	山上憶良?紀伊行幸時の歌	26	31			
691	5					27	32		
692	6					28	33		
693	7					29	34		
694	8			(藤原宮に遷都)		30	35		
695	9					31	36		
696	10					32	37		
697	文武元			文武	多治比島		33	38	
698	2							34	39
699	3							35	40
700	4					36	41		
701	大宝元					無位山上憶良、遣唐少録。(大宝律令制定)	37	42	
702	2					(大宝律令を施行)	38	43	
703	3				39	44			
704	慶雲元	元明	石上麻呂	山上憶良、この年帰朝か	40	45			
705	2			(大伴安麻呂、大納言。兼帥)	41	46			
706	3				42	47			
707	4				43	48			
708	和銅元			(柿本人麻呂、この頃没か)	44	49			
709	2				45	50			
710	3			(平城京に遷都)正五位上大伴旅人、左将軍	46	51			
711	4	藤原不比等	藤原不比等	大伴旅人、従四位下叙位	47	52			
712	5			(古事記撰進)	48	53			
713	6				49	54			

714	7			山上憶良、従五位下叙位〔正六位下から〕	50	55
715	霊亀元			大伴旅人、従四位上叙位。中務卿任官	51	56
716	2	元正		山上憶良、伯耆守任官	52	57
717	養老元				53	58
718	2			大伴旅人、中納言任官	54	59
719	3			大伴旅人、正四位下叙位	55	60
720	4			大伴旅人、征隼人持節大將軍（日本書紀撰進）	56	61
721	5		長屋王	大伴旅人、従三位叙位。山上憶良、東宮侍講	57	62
722	6				58	63
723	7				59	64
724	神亀元			旅人、正三位叙位。憶良、長屋王の宅で七夕歌	60	65
725	2	聖武			61	66
726	3			山上憶良、この年筑前守任官か	62	67
727	4				63	68
728	5			大伴旅人、大宰帥任官。旅人の妻病死	64	69
729	天平元			（二月、長屋王自殺。八月、光明子立后）	65	70
730	2		藤原武智麻呂	大伴旅人の宅で梅花の宴。旅人大納言任官帰京	66	71
731	3			大伴旅人、従二位叙位。旅人没	67	72
732	4			山上憶良、この頃貧窮問答歌。この頃上京		73
733	5			山上憶良没か		74

### 【大伴旅人の歌】

み吉野の 吉野の宮は 山からし 貴くあらし 川からし さやけくあらし 天地と 長く  
久しく 万代に 変はらずあらむ 幸しの宮（3・315）  
昔見し象の小川を今見ればいよよさやけくなりけるかも（3・316）

#### 大宰帥大伴卿の、凶問に報ふる歌一首

禍故重 疊し、凶問累集す。永に崩心の悲しびを懐き、独り断腸の泣を流す。但し両君  
の大きなる助に依りて、傾命を纒に継げらくのみ。筆の言を尽さぬは、  
世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり（5・793）  
古今、嘆く所なり。

吾妹子が見し頼の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき（3・446）  
磯の上に根這ふむろの木見し人をいづらと問はば語り告げむか（3・448）  
妹と来し敏馬の崎を還るさに独りして見れば涙ぐましも（3・449）  
人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり（3・451）  
吾妹子が植系し梅の樹見るとにこころ咽せつつ涙し流る（3・453）

わが盛また変若めやもほとほとに寧樂の京を見ずかなりなむ（3・331）

我が命も常にあらぬか昔見し象の小川を行きて見むため（3・332）  
沫雪のほどろほどろに降り敷けば平城の京し思ほゆるかも（8・1639）

大宰帥大伴卿、酒を讃むる歌十三首

駿なき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし（3・338）

酒の名を聖と負せし古の大き聖の言のよろしさ（3・339）

古の七の賢しき人たちも欲りせしものは酒にしあるらし（3・340）

賢しみと物いふよりは酒飲みて酔泣するしまさりてあるらし（3・341）

言はむ為便せむ為便知らず極りて貴きものは酒にしあるらし（3・342）

なかなか人とあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ（3・343）

あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似む（3・344）

価無き宝といふとも一坏の濁れる酒にあに益さめやも（3・345）

夜光る玉といふとも酒飲みて情をやるにあに若かめやも（3・346）

②①世のなかの遊びの道にたのしきは酔泣するにあるべくあるらし（3・347）

②②今の世にし楽しくあらば来む生には虫に鳥にもわれはなりなむ（3・348）

②③生者つひにも死ぬるものあれば今の世なる間は楽しくをあらな（3・349）

②④黙然をりて賢しらはすと酒飲みて酔泣するになほ若かずけり（3・350）

【山上憶良の歌】

紀伊国に幸しし時の川島皇子の御作歌 或は云ふ、山上臣憶良の作

白波の浜松が枝の手向け草幾代までにか年の経ぬらむ 一に云ふ、年は経にけむ

日本紀に曰はく、朱鳥四年庚寅の秋九月、天皇紀伊国に幸すといへり。（1・34）

山上臣憶良大唐にある時、本郷を憶ひて作る歌

いざ子ども早く大和へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ（1・63）

日本挽歌一首（長歌一首・反歌五首あるうち、反歌二首）

悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごと見せましものを（5・797）

妹が見し棟の花は散りぬべしわが泣く涙はまだ干なくに（5・798）

神亀五年七月二十一日 筑前国守山上憶良 上る

子等を思ふ歌一首 序を并せたり

釈迦如来い、金口に正に説きたまはく、等しく衆生を思ふこと、羅睺羅の如しとのたまへ

り。又説きたまはく、愛は子に過ぎたりといふこと無しとのたまへり。至極の大聖すら尚し子を愛しづる心あり。況むや世間の倉生の、誰かは子を愛しびずあらめや。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ 何処より 来りしものそ 眼交に もとな懸りて 安眠し寝さぬ（5・802）

反歌

銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも（5・803）

山上憶良臣、宴を罷る歌一首

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ（3・337）

術も無く苦しくあれば出で走り去ななと思へど児らに障りぬ（5・899）

敬みて熊凝の為に其の志を述ぶる歌に和ふる六首 序を并せたり（そのうちの二首）

筑前国守山上憶良

大伴君熊凝は、肥後国益城郡の人なり。年十八歳にして、天平三年六月十七日に、相撲  
使某国司官位姓名の従人と為り、京都に参向ふ。为天に幸あらず、路に在りて疾を獲、  
即ち安藝国佐伯郡の高庭の駅家にて身故りぬ。（以下略）

家に在りて母がとり見れば慰むる心はあらまし死なば死ぬとも（5・889）

出でて行きし日を数へつつ今日今日と吾を待たすらむ父母らはも（5・890）

一世には二遍見えぬ父母を置きてや長く吾が別れなむ（5・891）

貧窮問答の歌一首 短歌を并せたり

風雑へ 雨降る夜の 雨雑へ 雪降る夜は 術もなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつづし  
ろひ 糟湯酒 うち啜ろひて 咳かひ 鼻びしびしに しかとあらぬ 鬚かき撫でて 我を  
除きて 人は在らじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り 布肩衣 有りのことごと  
と 服襲へども 寒き夜すらを 我よりも 貧しき人の 父母は 飢寒寒ゆるむ 妻子ども  
は 吟び泣くらむ 此の時は 如何にしつつか 汝が世は渡る  
天地は 広しといへど 吾が為は 狭くやなりぬる 日月は 明しといへど 吾が為は 照  
りや給はぬ 人皆が 吾のみや然る わくらばに 人とはあるを 人並に 吾も作るを 綿  
も無き 布肩衣の 海松の如 わわけさがれる 襦袢のみ 肩にうち懸け 伏慮の 曲慮の  
内に 直土に 藁解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 囲み居て 憂へ  
吟ひ 竈には 火氣ふき立てず 甑には 蜘蛛の巣懸きて 飯炊く 事も忘れて 鶺鴒の  
呻吟ひ居るに いとのきて 短き物を 端截ると 云へるが如く 楚取る 里長が声は  
寝屋戸まで 来立ち呼ばひぬ 斯くばかり 術なきものか 世間の道（5・892）

世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば（5・893）

山上憶良頓首謹みて上る

山上臣憶良の、秋の野の花を詠む二首

秋の野に咲きたる花を 指折りかき数ふれば七種の花 其の一（8・1537）

萩の花尾花葛花瞿麦の花女郎花また藤袴朝貌の花 其の二（8・1538）

山上臣憶良の沈き痾の時の歌一首

士やも空しかるべき万代に語り続くべき名は立てずして（6・978）

右の一首は、山上憶良臣の沈き痾の時に、藤原朝臣八束、河辺朝臣東人をして疾める状を問はしむ。

ここに憶良臣、報の語已に畢り、須ありて涕を拭ひ、悲しび嘆きて、この歌を口吟ふ。